



羅針盤



岩澤 うつぎ
Utsugi Iwasawa

東京都立広尾病院皮膚科 部長

人生いろいろ，皮疹もいろいろ

今回は「今さら聞けない，皮膚病変の色の診かた」と題して皮膚疾患を色別に分類しカラーアトラスを作成しました。皮膚疾患を赤，紫，白，黄，黒，茶に分けました。

皮膚科の診察ではまず，皮疹を診ます。どんな色をしているか，そして形を診ます。患者さんにその皮疹がいつからあり，痒みや痛みがあるかを聞きます。その時点である程度診断がつくのではないのでしょうか。

皮膚疾患は数多く存在しますが，色と形のパターン認識です。何回か見ているうちに，『以前診察したあの患者さんに似ている！』とか，『先月の Visual Dermatology に載っていた皮疹と同じだ！』，ということがあるはずですが，色調のパターン認識をするためには，どうしてそういう色になるのか，色の成り立ちがわかれば理解しやすいでしょう。

そして，もう一つ重要なことは，皮膚疾患は時間によって色が変化してくることです。本誌編集委員長の大原國章先生がクロノロジーとして多くの症例を提示してくださっていますが¹⁾，皮膚疾患は常に同じ色，状態であるものは少ないのです。例えば帯状疱疹（→ p.666）も，はじめはうっすら紅い程度で，数日すると水疱がでてきます。はじめからしっかりと帯状の構造がでていればいいのですが，軽い患者さんでは紅斑が2個だけとかという時もあります。低温熱傷（→ p.713）も，はじめは紅斑で2週間ほどすると黒色壊死になる，といった具合です。

その経過を理解しておかないと，帯状疱疹を『水疱がないので，湿疹か虫刺されでしょう』と説明してしまっ

たり，『やけどは2週間で治りますよと言われたのに，黒くなってきた』と言われることもあります。

最近の技術の進歩で医療の世界にも AI（人工知能）の活用が具体化されようとしています。色と形のパターンを認識すれば AI が診断してくれる時代がすぐそこまで来ています。

皮膚科や放射線科などは遠隔診療が具体化されつつあります。そうなると将来，皮膚科医は不要になる？ そんなことはありません。

皮膚科は他の科と違い，皮疹の色，性状を診ることにより診断することができるという大きな利点があります。しかし，診断だけなら機械でもできる時代にわれわれ皮膚科医は人間として，患者さんに説明し，適切な治療を行うことが大切です。昭和の歌謡曲ではありませんが「人生いろいろ，皮疹もいろいろ」です（古い？）。今特集号がその一助になれば幸いです。

なお，今回は紙面の都合もあり，典型的な疾患を選んだつもりです。まだまだ多くの疾患がありますので，また次の企画で追加も作成していきたいと思えます（次があればですが……）。

そして，疾患の治療や病理については割愛している部分が多いこともご了承ください。

文献

- 1) 大原國章：皮膚疾患のクロノロジー，学研メディカル秀潤社，東京，2012